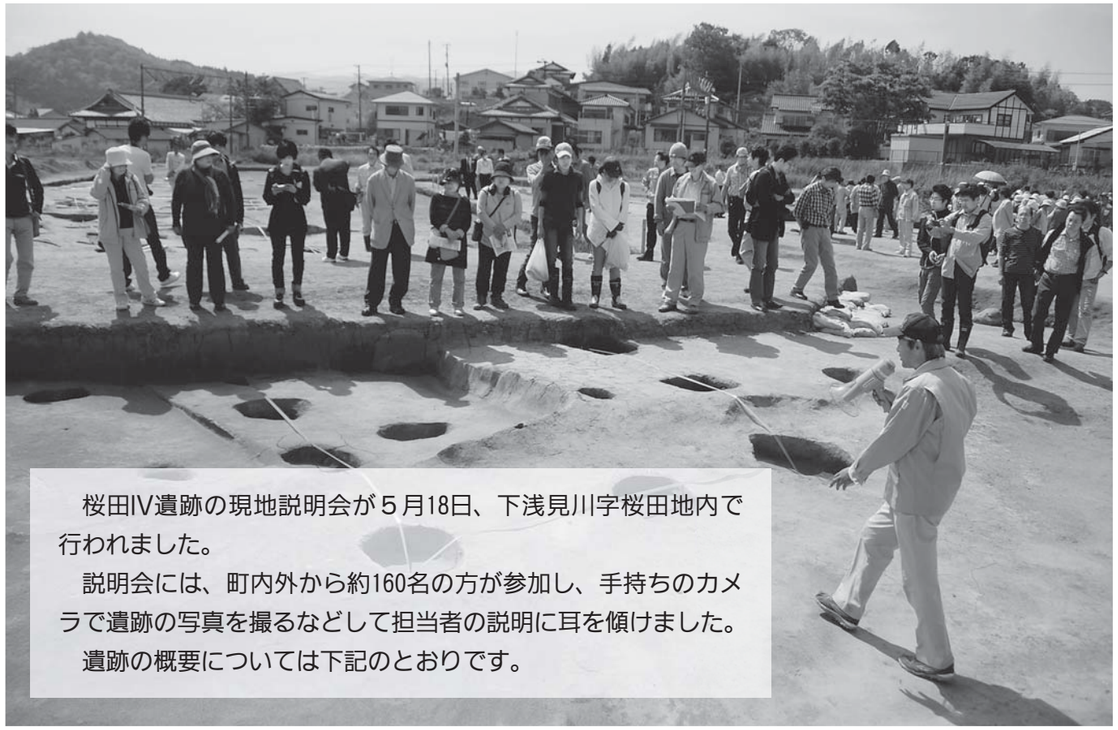
桜田Ⅳ遺跡　現地説明会開催

～ 奈良時代の遺跡にみる歴史ロマン ～



桜田Ⅳ遺跡の現地説明会が５月18日、下浅見川字桜田地内で行われました。

説明会には、町内外から約160名の方が参加し、手持ちのカメラで遺跡の写真を撮るなどして担当者の説明に耳を傾けました。

遺跡の概要については下記のとおりです。

調査の経緯

桜田Ⅳ遺跡の発掘調査は、平成23年３月11日に発生した東日本大震災からの復興事業のひとつである災害公営住宅の建設に伴い実施しています。

桜田Ⅳ遺跡は、平成24年９月に実施した試掘調査によって発見されました。事業計画のうち３８００㎡について本発掘調査が必要となったため、平成24年12月21日から調査に着手しました。

平成24年度の調査の結果、奈良時代（約１３００年前）の遺跡で、大きな溝で仕切られた区画内に、計画的に配置された掘立柱建物を確認しました。これは、奈良・平安時代の歴史書（『続日本紀』・『日本後紀』）に記された「海道」と呼ぶ官道沿いに設けられた「駅家」の一つである可能性が考えられました。

平成25年度の発掘調査は、掘立柱建物や竪穴住居の詳細な調査を進めることで、遺跡の性格を特定することを目的としています。

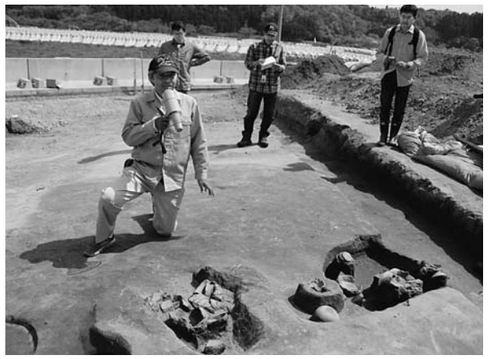
桜田Ⅳ遺跡の位置と周辺の遺跡

調査でみつかったもの

1 主な遺構は、４区を中心に広がる掘立柱建物12棟や竪穴住居６棟などで、多くが奈良時代のものです。

2 これらは、互いに重なっていることから、何度か建て替えられたことが分かります。なかでも、奈良時代前期のある時期には、２間×３間の掘立柱建物５棟が直線的に並んでいたことが分かりました。柱穴は正方形や長方形ですが、なかには２つの柱を一連で掘った溝状の柱穴もあります。

3 直線的に並ぶ５棟の建物の北には、これと平行する大きな溝があり、建物群の北の境界を区切る溝と思われます。



竪穴住居　カマド周辺土器出土

4 建物の柱穴や溝などの中からは、奈良時代の土師器・須恵器とよぶ土器が出土しました。他の時代の土器は出土していません。

5 地表面の地割りの観察から、調査区の東に一辺約１００ｍの台形の区画が認められます。

6 調査区の北東には、奈良時代に行われた条里地割と合う道が現存しています。これは奈良時代の海道の名残の可能性があります。

遺跡の概要

柱穴の形状や計画的に配置された建物のあり方は、全国各地で発見されている古代の役所跡（国衙・郡衙・それらの出先機関・駅家など）と共通する部分があります。

養老３（７１９）年から弘仁２（８１１）年の間に、石城国（主に現在の福島県浜通り地方）に10の駅家があったことが歴史書に記録されています。

浜通り地方には、磐城郡衙として既に根岸遺跡（いわき市平）が知られており、桜田Ⅳ遺跡の近くに海道を想定することもできます。このため、当遺跡は駅家関連遺跡の可能性があります。

駅家とは、みやこから各地に張り巡らされた官道に約16㎞ごとに置かれた、早馬を乗り継ぐための交通の拠点施設です。

桜田Ⅳ遺跡を駅家と考えるなら、調査区東側の台形区画が中心施設で、今回見つかった建物群は付属施設と捉えられそうです。

古代の主要幹線道（木下良『日本古代の道と駅』より）

今後の取り組み

発掘調査の実施にあたっては、福島県教育庁文化財課や奈良文化財研究所の技術支援を受けるとともに、発掘調査と公営住宅建設工事を同時に実施するなど、復興事業に伴う発掘調査の迅速化に取り組んでいます。

また、奈良時代の掘立柱建物がたくさん見つかった地区を保存し、将来的に地域の歴史・文化に触れることができるような整備・活用の方法を検討していきます。

桜田Ⅳ遺跡の発掘調査で得られた成果を広野町の歴史・文化の発展に役立て、「誇りあるふるさとの再生」を理念とする町づくりに取り組んでいきたいと考えています。